

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2013 年 1 月 3 日

派遣者氏名（専門分野）	藤本百々子	（ 演劇学 ）
-------------	-------	---------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	近代歌舞伎の観客層の変化 —明治 20 年代初期・柳盛座の絵入役割番付を事例に—
-------	---

派遣期間

2012 年 10 月 8 日 ～ 2012 年 12 月 18 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	英国	ロンドン	大英図書館	大塚清代氏・ Hamish, Todd
	英国	ロンドン	大英博物館	Haft, Alfred 氏

派遣先で実施した研究内容

博士論文のテーマである「歌舞伎興行における近代」を考察するため、近世から近代にかけて発行された歌舞伎の上演資料である番付、中でも絵入役割番付及び絵尽の書誌的調査を、日本関係の文献を相当数所蔵することで有名な大英図書館及び博物館にて行った。前者については、『浅草柳盛座番付 明治二十六年』（shelfmark: ORB.40/117）と仮称される番付集をとりわけ調査対象とし、後者については 31 点の絵尽を調査対象とした。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

(研究当初の目的)

先述の博士論文のテーマを考察するため、近世から近代にかけて発行された番付を国内外問わず網羅的に閲覧し、番付の記載内容に変化があるのか否かを検討することが本研究の当初の目的であった。変化の見極めを通して、歌舞伎が近代以後、その興行内容ないし方法において何を変化させたのか、ひいては歌舞伎における近代を考察することが本調査の主眼であった。

(計画の達成状況)

上の目的を達成するため、大英図書館においては『浅草柳盛座番付 明治二十六年』と仮称される番付集の、大英博物館においては絵尽の網羅的閲覧を計画した。

特に博物館については収蔵館の性格上、利用者に常に開放される閲覧室自体を有していない。毎週水曜日のみ、最大で 3 時間 45 分間、アジア部の閲覧室が解放されるにとどまり、渡航以前はそれ以外の閲覧室の利用が可能であるか否かについて、博物館からの明確な返答が得られな

かった。したがって閲覧時間が豊富である図書館を調査の主軸とし、博物館は閲覧が許される限りの範囲で調査を行う予定であった。

結果、図書館蔵の番付集については「明らかにできた成果」内で後述する通り、考察に必要な情報を得るべく3次調査まで書誌的調査を行うことができた。一方博物館については所蔵絵尽全102点のうち、31点について書誌的調査を完了した。全絵尽の半数も閲覧していないため、達成状況を数量的に表せば不十分の感がある。しかしながら限られた閲覧時間の中、後の成果の項で説明のように博士論文作成のための基礎的研究にとり有用な成果を得たこと、また当初の目的の通り、大英図書館において十二分な調査を終えたことから、計画目的を十分に達成したと考える。

(明らかにできた成果)

大英図書館

まず大英図書館の番付集については、調査者が初めての閲覧者であるため、当該資料の現状把握をすべく書誌的調査を行うことが先決であった。まず1次調査より、①当該番付集に所収された番付の種類は絵入役割番付であること、②外題簽の内容とは異なり、柳盛座を中心とした浅草の小芝居の明治20年代初期から後期の絵入役割番付であることがわかった。全71点の絵入役割番付の内訳は以下の表の通りである。

劇場名	点数	興行年月日が判読可能であった点数	興行年
柳盛座	65	43	M(註1).20-27
浄瑠璃座	3	3	M.20、M.22
常盤座	2	2	M.21、M.24
吾妻座	1	1	M.21

註1) Mとは明治の略である。

③さらに資料の現状形態(各番付を山折にし袋綴じにした番付集)と元来の形態(一枚刷り)とが異なることから、旧蔵者ないしそれ以前の所有者らにより、現状の形態が取られたことがわかった。①から③までの1次調査結果を得た後、③の大英図書館蔵の柳盛座をはじめとした番付集の固有の資料価値を見極めるため、旧蔵者につながる情報、及びその嗜好を知るための2次調査を行った。

その結果、(袋綴じにした番付1枚を1丁と数えると)1から21丁までの番付には鉛筆による書込みが概ねなされていたこと、虫食いなどの経年変化によるものではない激しい破損が所々に見られること、興行年月日順ないし劇場順に番付を厳密に配列していないこと、そして番付の裏面より番付が贈答品であったことがわかった。これらの2次調査の結果より、浅草の小芝居、とりわけ柳盛座に関心のある者が自身の観劇記録であるよう、番付集を作成したのではないかという推測を得た。しかし、挿絵部分ないし文字が書かれた部分にも大きな破損が見られることから、番付所有者ら(番付集作成者を含む)が当該番付集の保存にとりわけ心を配っていなかったことが推測される。また番付を興行年月日が見えないよう時折綴じていること、さらには興行年月日順ないし劇場順に番付を正確には配列していないことから、記録としての厳密性にも固執していないことも読取れる。一方で他者から見ると理解不能な番付の並び順、そして

先述の書込みを、当該資料固有の価値と考えることもできる。ただし書込みの内容は、和暦のみないし和暦と配役名の併記に留まり、番付の記載内容と関連が認められないこともあり、また国内に現存する番付のように、番付に欠損している情報が書込みの情報から補われることはほぼなかった。

最後に 2 次調査の段階で、番付の下部に配された配役を記す欄において配役名の記載方法が大きく変わっていたことがわかった。そこで 3 次調査を行い、絵入役割番付の記載方法が近代以後変化したか否かを、当該番付集に限定するが見極めた。その結果明治 25 年以前は、同一興行内で複数の狂言が上演される場合であっても、配役を記す欄を任意に区切らず、番付の左端から右端までに役者名毎に配役を記載した。これは近世以来続く配役の記載方法であり、どの狂言にどの役名が登場するのかは観客自身が判断することになる。さらには書出し(配役欄の右端)、中軸(同欄の中央)、留め筆の位置(同欄の左端)に配される役者の文字の太さが、他の場所に記される役者の文字のそれよりも幅広であり、役者名も 5 回連続して記載される。これら文字の太さと役名の多さが、各興行の座組内での役者の力関係を視覚的に示す効果を持っていた。しかし明治 26 年以後はこの記載方法が崩れ、各狂言の幕毎に役者名を記すことになった。また幕毎に設けられた配役欄内で、書出し・中軸・留め筆の位置にくる役者名が強調して記載されることもなくなった。特筆すべきは、座頭が留め筆に記されるのが明治 25 年までは常であったのが、明治 26 年以後は書出し・中軸に記されることとなり、座頭の記載位置が近世期と完全に異なることである。

明治 25 年以前の配役欄の記載方法は、近世期のそれを踏襲したものであり、歌舞伎をよく知る者でなければ判読不能な配役の記載方法である。一方、明治 26 年以後の方法は歌舞伎をよく知らない者でも分かるよう、狂言の幕毎に配役を記載している。この配役欄の記載方法の変化より、大英図書館蔵の柳盛座の番付に限定すると、明治 20 年代中期より、歌舞伎の観客層がこれまで歌舞伎を観たことのない人々までも包摂しよう、これまでとは異なる層に自身を宣伝しようとしたのではないかと思われる。このことは近代歌舞伎が、近代までの興行方法では自身の生き残りが不可能であることを悟り、興行の宣伝方法において新たな一步を踏み出したことを示す証左と思われる。

大英博物館

次に大英博物館においては絵尽を閲覧した。閲覧した絵尽の全てが未考証であるため、大英図書館同様に書誌的調査より着手した。中でも近世期の中座の絵尽の裏表紙より、内茶屋の名前が見られた。近世期の役割番付に内茶屋の名前が見られることは往々にしてあることだが、内茶屋が何の目的で番付面にその名前が記載されていたのかは未だ不明である。しかし近世期の劇書より、内茶屋が番付の販売・仕入所であることがわかる。よって販売・仕入者として役割番付にその名前が記載されたと推測されるが、絵尽からもその名前の記載が認められたことから、内茶屋が諸番付の販売・仕入者であったのではないかという証左を新たにまたひとつ得た。

両収蔵館より得た成果のまとめ

以上のように大英図書館では詳細な書誌的調査を通して、近代歌舞伎興行において柳盛座に限定されるも、番付の記載方法に変化があったことを導き出し、ひいては歌舞伎の観客層が近代において変化したのではないかという結論を得た。これは歌舞伎興行の近代を考えることを

テーマとした、博士論文の基礎的研究の一部を成し、本調査を同論文作成のための基礎研究と位置づけ開始したことから、調査前の計画を十分に達成したといえる。また明治 25 年という時期は、歌舞伎にとり新派という新たな競争者が登場し、近世期と比較し、歌舞伎の対抗者が増えた時期でもある。記載方法の変化が明治 25 年を境に見られる 1 つの理由としては、歌舞伎が新たな対抗軸の存在を意識し、新たな観客層の獲得のために近代以後変化せざるを得なかったことが推測される。本調査から得られたこの推測は、歌舞伎における近代という歌舞伎史を論じる上での重要な課題に対する回答の一部を成し、歌舞伎研究上重要な結果をも得たといえよう。

なお柳盛座の番付の国内における現存状況を可能な限り渡航以前に調査した結果、大英図書館蔵のそれらは国内に現存しない、新出資料である可能性が高い。国内現存分の徹底的な所蔵確認、そして同時代に刊行された雑誌・新聞掲載の先の劇場の興行記録の調査を追加的に行えば、明治 20 年から 23 年までの柳盛座の興行記録の穴を埋めることが、本調査により可能となる。さらには柳盛座の番付の記載方法が明治 25 年以前に変化がなかったことを、これら新出資料の存在が確実なものとし、本調査の結果が同劇場の興行史研究にまで波及することが判明した。

最後に大英博物館では閲覧日が先述の通り大変限定的な中、内茶屋が番付の販売・仕入者であったことを示す証左を絵巻より得た。渡航以前に行った国内での調査結果より、近代以後、番付の販売・仕入から内茶屋が手を引くことは分かっており、近世期の内茶屋の番付に関する活動状況を先の博物館蔵の絵巻より知ることにより、近世から近代にかけて番付の販売・仕入者が変わったことを確信した。茶屋は歌舞伎の座席販売代行業を主たる業務とし、一時は興行の座組に口出しをする程の強大な勢力を誇った組織である。ゆえに歌舞伎興行史を論述する上では必須の存在であり、茶屋の中でも内茶屋の活動状況が近世から近代にかけて変化したことを明らかにしたこともまた、歌舞伎における近代を考えるための基礎的考察として重要なことである。今後は本調査中に閲覧不可能であった残る絵巻について網羅的閲覧を進め、かつ近世期に刊行された劇書等の追加的調査を行うことにより、本調査から得た内茶屋が番付の販売・仕入に関与していたという証拠を、さらに積み重ねていく予定である。その証拠の積み重ねが、歌舞伎の興行を論じる上で欠かせない内茶屋を含む茶屋の近世期における活動状況をさらに明らかにし、茶屋研究のさらなる発展の余地を本調査の結果が導き出した。

派遣後の研究発表の予定

研究発表の具体的な機会を得ていないが、毎月ないし隔月で専門分野に関連した研究会が開催されていること、また年に一度歌舞伎学会が開催されるため、それらを研究発表の場として予定している。